

さて、今回は年度の切り替えの時に発達障がいを持つ子ども達にどんな配慮が必要なのか？ってお話です。僕たちでも年度の変わり目になると若干不安定になりますよね。いつもと違う何かが始まる感じが不安を煽るんでしょうかね。

僕4年生の時に転校してるんですよね。めちゃくちゃ不安だった覚えがあります。友達できるかな？とかイジメられないかな？とか色んな不安がありました。惜りてきたネコみたいになってました。でも学校のルールとか、友達同士の暗黙の了解とかが解れば、もう大丈夫でした。「知らない」ことは怖さや不安と同じなのかもしれませんね。一番の安定剤は「知る」ことかもしれないですね。

久田

第52回『わかるように伝えていますか』

香川大学 坂井 聡

発達障害のある子どもと新しい生活環境

今回からは、来年度に向けて新しい生活環境にどのような配慮がいるのか考えていくことにします。この文章は、「教育と医学」の4月号に寄稿したものを、少し書き加えているものです。

年度替わりは、多くの人たちに新しい環境との出会いを提供するものです。大人にとっても子どもたちにとっても、それは必ず訪れるものです。ある人は転職、ある人は就職、ある子どもは進学、ある子どもは進級、そして、ある子どもは転校といったように、新しい環境と出会うことになるのです。この新しい環境に希望を抱き、それを楽しみにしているひとも多いと思われます。

しかし、一方で新しい環境を、希望はもちながらも、大きな不安を感じながら迎える人たちがいることも、忘れてはならないと思うのです。特に子どもたちの場合は忘れてはならないと思います。発達を促す重要な時期の経験がどのようなものなのかは、今後のその子の学校生活に大きな影響を与えることになると思われるからです。このことを特に教育の専門家である教師は知っておかなければならないと思います。特に配慮を必要とするのが、発達障害のある子どもたちではないでしょうか。そのなかでも自閉症やアスペルガー症候群のある幼児、児童、生徒には、その特徴から考えて特に支援が必要になるのではないかと思います。そこで、今回から数回にわたって、通常の学級に在籍している高機能自閉症やアスペルガー症候群のある子どもたちに焦点を当て、新しい環境を迎える一人一人の子どもたちを理解し、環境を整えるためには、どのような視点が必要なのかについて考えていきたいと思います。

発達障害ということばは、近年、広く認知されるようになり、マスコミ等でも取り上げられることが多くなってきたので、聞いたことのある人も多くなっていると思います。

文部科学省は発達障害を「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるもの」と定義しています。

この発達障害の定義をもとに、文部科学省は2012年に全国の小、中学校を対象として実態調査を実施しました。これは大規模なものとしては2002年に続いて2回目になります。この全国実態調査の結果は、学習面の困難さを示す児童が4.5%、行動面で著しい困難を示す児童、生徒が3.6%、学習面、行動面の両方に著しい困難を示す児童、生徒が1.6%、そして学習面か行動面のどちらか、あるいはどちらにも著しい困難さを示す児童が6.5%いることが明らかになったのです。前回の検査から0.2%増える結果となりました。

この調査は専門的な診断による調査ではないため、児童の発達障害の有無を調べたものではありません。しかし、小学校通常学級の担任が、子どもの典型的な行動特徴をどの程度把握しているのかという調査であるため、教育現場をフィールドにしている人にとっては、重要な意味を持つ数値であると思うのです。

坂井聡先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞

(著書)

暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里） クラスルームコミュニケーション（こころリース出版会） 自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンパワメント研究所）など